

目次／Contents

仰視のエロティシズム 谷川渥 4

春／Spring 9

夏／Summer 41

秋／Autumn 75

冬／Winter 101

*The Eroticism of Gyoshi* 139

# 仰視のエロテイシズム

谷川 渥

日影眩が最初の個展を開いたのが一九八三年。女の子のスカートのなかを下から覗き上げる驚くべきローアングルのアクリル画の並んだ展覧会である。下着もあらわにたくましい太腿を上げるさまざまな姿態を表した絵画群に、人々はびっくり仰天し、そしてまさしくそうした下から上を見上げる作品に対して「仰天アングル」などという形容が与えられ、一九八五年には「日影眩の仰天アングル展」と銘打った展覧会も開かれるにいたり、しかもこの「仰天」という表現が各方面に波及することにもなったようだ。

「仰天」とは、なかなかインパクトのある表現だが、しかしこれは本来、人が驚きのあまり、おおむね突っ立ったままの姿勢で、天を仰ぐということであり、女の子のスカートのなかをほとんど地面に接するような視点からしたがって必然的に屈んだ、あるいは這うか寝転んだ姿勢を想定させる視点から仰ぎ見るのとは、やはりちよっと違うような気がする。だから私は「仰天」に代えて、より包括的な「仰視」という表現を採りたいと思うのだ。

日影眩が、この独自の「仰視」の絵画群によって、以後際立った存在感を示してきたことは、あらためて指摘するまでもあるまい。水平的あるいは俯瞰的描法に対して著しい対照をなすこうした仰視法は、しかしかならずしも歴史的に皆無であったわけではない。イタリアの絵画史のなかに、「ソツティンヌー (soffittine)」と呼ばれる技法が存在する。「ディ・ソツト・イン・ヌー (di sotto in su)」、つまり「下から上へ」見上げるとい意味の表現をつづめた形である。アンドレア・マンテーニャやアンドレア・ポッツォの天井画がその代表的な所産である。とはいえ、こうしたまじ絵的技法、あるいは壮大な宗教的イリュージョンとは異なり、日影眩の「ソツティンヌー」は、あくまでも人間を、人体を、そしてときとしてその背後に現出する都市空間を問題にする。人間の身体への特

異なる視点の採用というフォーマリスティックな試みこそが、その一貫した姿勢であると言うべきだろう。

ところでじつは、日影眩はいわゆる画家として社会的に登場する以前、一九七〇年代初めから八〇年代半ばにかけて新聞や週刊誌におびただしいイラストを掲載していた。「仰視のエロティシズム」とは、それらイラスト群を総体的に形容する表現である。それらのうち一九七九年から八二年にかけてスポーツ新聞に週一回連載したモノクロのイラストのほとんどすべてを収録した本書は、画家日影眩の比較的知られざる前身をあますところなく伝える瞠目の一書となるだろう。

それにしても日影眩における「仰視」とはなにか。便宜的に四つの季節に振り分けられたイラスト群のなかの、どの絵を採ってみてもいい。エロティシズムというよりむしろ端的にエロと言ったほうがふさわしいかもしれない卑猥なまでの数々の構図において、仰視は、窺視、いわゆる覗き見とは微妙にして本質的な差異を示す。覗き見は、一方的に眼差しを送るだけで、相手から眼差しを送り返されることはない。江戸川乱歩は、いみじくも「隠れ蓑」願望という表現を使ったが、覗き見する者は「隠れ蓑」のなかに身を隠して自分の存在をいっさい気取られないようにしなければならぬ。日影眩のイラストには、女を下から狙う少年やおじさんなどの男たちの姿が画面内に登場し、しかもその光景の外側からと言ったらいだろうか、第三者の、とはとりもなおさず画家の、そしてわれわれ観者の視点によって、画面そのものが構成されている。そして眼差される女は、あらゆる方向に視線を彷徨わせるかと思えば、また眼差す男たちの、あるいは想像上の画家の（そしてわれわれの）ほうにみずから眼差しを投げ、ときとして目を合わせさえするのだ。だからどんなに覗きの場面を描いているように見える場合でも、まさしく《覗き見》と題された作品もあるが、そうした画面そのものは、覗き見として構成されているわけではない。

女のあられもない姿態あるいは痴態の連続に、これを浮世絵春画の現代版とみなす向きもあるかもしれない。だが注意しよう。日影眩の描く対象は、男女の絡みでもなければセックスでもない。男たちがどんなに女体に接近し、股間を覗き、またそこに手を伸ばすように見えようと、彼らが具体的に接触し密着することはまずないからだ。



日影眩『神はアメリカを祝福する』キャンバスに油彩 127×162.5cm 2007

それらはすべて見る者と見られる者、そしてその光景を（画家ともども）見る者による視線のドラマにほかならない。そこには犬や猫の視線がかかわることすらある。

たとえばハンス・ベルメールは、少女人形というかたちで、本来分節されざる肉体の部位を分節して接合し直すという観念的暴力をほし、ままに行使したが、日影眩は女の肉体そのものには手をつけず、女自身に想像しうるあらゆる姿態をとらせることで、観念的暴力といえは暴力をふるっているのだ。ひとりの女がどんなにあられない格好をとらうるか、そしてどんな角度から眺められるか、想像のかぎりの実験であると言ってもいい。

視線のドラマは、また欲望のドラマでもある。もとより、この欲望はなによりもまず眼差す男たちの欲望にはかならないが、そこには欲望する男（たち）と欲望される女という一方向的な関係があるわけではない。あられない格好をして男を挑発し、男の欲望を喚起する女は、自分が欲望されることを意識的無意識的に内在化することで欲望する、もうひとりの欲望の主体でもある。男たちは、女が見られることでみずからの欲望を密かにつらせるだろうことを感じて、いっそう欲望する。男が、そしてこの光景を眺めるわれわれが、ときに女と目を合わせるという事態は、そうした共犯者的なありようを象徴すると言ってもいいかもしれない。まさに欲望とは他者の欲望であるというジャック・ラカンの教説を彷彿とさせるようだ。そしてもちろんここでもうひとりの「他者」、すなわち画家の眼差しと重ね合わされたわれわれ観者の欲望も、このドラマを担う必須の要素であるはずだ。

女は、だから、ひたすら男の欲望の視線を受けとめるだけの受け身の、弱々しい存在であるわけではない。受身の、傷つきやすい、被害者性の、つまりヴァルネラブルなありようからは、むしろほど遠い。逆にふてぶていようにも思えてくる。仰視する男たちの視線は、一見攻撃的だが、じつのところ文字どおり仰ぎ見、讃仰し湯仰する視線にはかならないのかもしれない。

もっとも、かならずしも単純に「仰視」とは言い難い場面もないわけではない。ベッドや床や浴室などに横たわる女を対象とする場合がそれである。しかしそうした場合でも、おおむね女の足もどから上半身を見上げるような視線が問題になっていることに注意しよう。垂直軸ではなく水平軸においても、やはり「仰視のエロティシズム」は貫かれているのである。

いろいろな季節、いろいろな場所、いろいろな状況において、いろいろな女たちにあらゆる姿態をとらせ、そこに視線と欲望のドラマを現出させることを試みた、日影眩の想像力の冒険の比類のない軌跡として、本書を位置づけることができるだろう。言葉を換えれば、本書を性的想像力の類型学、あるいは性的想像力の万華鏡と呼んでも差し支えないかもしれない。いずれにせよ、本書に収められたこれらの作品群を見るわれわれ自身の想像力も、また等しく賭けられているのである。

## 『日影眩 仰視のエロティシズム』

---

2018年10月30日 初版第1刷印刷

2018年11月10日 初版第1刷発行

絵画 日影 眩

編者 谷川 渥

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1770-5 © Gen Hikage 2018, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。